

本校は、明治42年、日本の学校の原点と称される、板東の大学「足利学校」ゆかりの地に、足利郡立足利高等女学校として呱呱の声をあげました。

爾来、創立112年目となる本年に至るまで、常に地域における女子教育の中心校、拠点校として、その役割を担い続けてまいりました。これまでに本校を巣立った卒業生数は2万5千人を超え、国内外の様々な分野で活躍しています。

本校は栃木県の「第二期県立高等学校再編計画」により、来る4月に足利高校との統合を控えております。令和元年度に「統合新校設立準備委員会」が発足し、その準備が着々と進められてきました。先生方は、目の前の生徒たちの指導に全力を尽くす傍ら新校設立のための様々な準備業務にも汗を流してきました。

足利女子高校最後の1年となる本年度は、「足女高として最後の一年を、最高の一年にしよう!」と生徒に呼びかけ、生徒達は見事にこの呼びかけに応えてくれました。3月1日には、足利女子高等学校最後の卒業式が挙行され、私は式辞の中で次のように生徒に呼びかけました。

「卒業に当たり、皆さんにこれからの人生で、心に留めておいてほしいこと、お願いしたいことがあります。それは「言葉を大切にすること。」ということです。(中略)臨床心理学者カール・ロジャーズは「心の扉は内側からしか開かない」と言っています。真のコミュニケーションというのは、外側からではなく、内側から働きかけることによって成り立つということです。そしてそれは言葉によってなされるものと思います。(中略)「全ての思考の中心に言語、即ち言葉がある」と言われますが、私たちが日常的に慣れ親しんでいる言葉は、いわば私たちにとって、パソコンのOSと同じ役割を持っていると何かの本で読んだことがあります。使いこなせる言葉が多いほど、思考の解像度は高くなって、様々な表現を理解し共感できるようになります。AIのさらなる進化やグローバル化の進展など急激に社会環境が変化していくこれからの時代、しなやかで強い自分軸を作っていくためにも、OSである言葉を大切にすることが重要であると思います。」

さて、この度、本校の研究論集「綾」の最終巻が刊行される運びとなりました。諸事情により、紙媒体ではなくホームページでの刊行となりました。いずれの原稿も私たちの思考を刺激する「言葉」に満ち、内側に働きかけてくる素晴らしい内容のものです。本誌が、本校職員のみならず県内外の多くの教職員の方々の目に触れ、広く有効活用され、その成果が次代を担う生徒たちに還元されることを切に希望いたします。

最後に、多忙な中、玉稿を寄せていただいた先生方と発行の労をとっていただいた先生方に感謝申し上げ発刊の言葉といたします。